

年間第六主日

2018.2.11

マルコ 1:40-45

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

「御心ならば、わたしを清くすることがお出来になります」。今日の福音に語られている重い皮膚病を患っていたあの人は、イエスの前にひざまずいてこのように願ったのでした。「御心ならば」とは、「あなたがお望みになられれば」ということです。この願いに応じて、イエスは「よろしい清くなれ」と言われます。あの人の願いに応じて、イエスは「わたしは望む。清くなりなさい」と言うのであります。イエスは、あの重い皮膚病を患っていた人が思い描いていた通りのお方だったのです。ご自分の前に身を投げ出して、清められることを願っているあの人をイエスは深く憐れまれ、手を伸ばして彼の病み爛れた体に触れてくださるのであります。あの人が願っていた以上のことをイエスはしてくださるのであります。あの人の病がイエスに移るのではなく、イエスの清さがあの人を清めるのです。こうしてあの人は、願っていた通りに癒され、清められたのです。

それにしても、彼はどのようにして、このようなイエスへの信仰を持つことが出来たのでしょうか。人々の間に広まったイエスの評判は、その病の故の孤独な闇の中にいた彼のもとにも確かに届いていたにちがいません。だから彼はイエスというお方を知ることができたのです。特筆すべきことは、彼の耳にも届いたイエスというお方のその評判は、自分のような者には関わりなどあろうはずがないと彼が思わなかったことです。彼は自分の身を顧みず、律法の掟を無視してでも、自分の方からイエスに近づき、その御前に身を投げ出したのです。

今日の福音のこの人は、その病の故の偏見や差別をものともせず、イエスに対する思いに一途に縋り付いたのであります。ひるがえって、わたしたちのイエスに対する思いを顧みたいと思います。今日の福音のこの人のように、わたしたちも、教会を通してイエスというお方の評判を聞いているはずですが、わたしたちが聞いているはずの、イエスについての証しのことばは、どこまでわたしたち自身と関わりのあるものとなっているのでしょうか。「あなたがお望みなられば、わたしたちの願いは必ず叶えられます」と祈っていると云えるのでしょうか。

今日の福音の続きを見てまいりましょう。病を癒され、清くされたあの人にイエスはこう言われます。「行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清め

のために捧げて、人々に証明しなさい」。病が癒されることを願っていた彼に、イエスはこのように言われます。彼が本当に願っていたことが何であったかをイエスは彼に思い出させてくださるのです。その病のゆえに神に呪われた者とみなされ、神の民の交わりから締め出されていたこの人をイエスはその交わりの中に導こうとされているのです。そのためにイエスは彼に、モーセの律法に従って、清めの捧げものをするようにお命じになります。こうして、この人は自分を神の民の交わりから締め出した律法の呪いから解放され、神の民の一員としての身分を回復するのです。こうしてイエスは、重い皮膚病を患っていたこの人を、彼が心の奥で願っていた交わりの世界へと解き放ってくださるのです。

福音書の中に語られているすべての人の中にわたしたちは自分自身の姿を見出すことができるはずで、福音書はそのようなことを意図して書かれているのです。今日の福音のあの人になさってくださったことを、わたしたちの中にも実現してくださることをイエスに願いたいと思います。